

セツ の つゆん



ひと言

「私災」から「公災」へ

数見 隆生 (センター運営委員)

大震災直後、県外の多くの方から「大変でしたね」といわれ、支援物資も送っていただいたが、そうした私災意識は二週間もすれば脱したものの、四月に入り県内の被災地、被災校を視察し始め、取材もさせてもらって、私の意識は「公災」へと大きく転換した。四月三日に若林区の沿岸部を視察して自然のすさまじい驚異を痛感させられた。学校は？ 子どもは？ と心を突き動かされ、その三日後に石巻の被災した大川小学校跡を視察し、その心境は決定的となった。

この事態を「天災」として「自然のもたらしたやむをえない災害」としてすませ「風化」させては絶対ならないという思いである。子どもが守られた学校もあれば、少なからず子どもの被災のともなった学校もある。何が違い、何が教訓なのか、そのことを明確にしなれば、他の地域で、また何年か後に、再び惨事をもたらしてしまうであろうことを、心に刻んだのだ。震災時の対応だけでなく、学校の立地条件や事前の避難準備、地域との連携等、様々ある。

福島原発問題に至っては、まさに人災・社会災であり、人類の生き方や社会を問う「公災」である。この問題を、被災地の人々だけの私災とみる感覚を、他の大多数の人間がどう脱せられるか、それこそが問われている。

目次

ひと言	数見 隆生	1
学校再生への道を考えるために 鈴木洋子さん(前門脇小学校校長)に聞く	千葉 保夫	2
運動会に見る被災地住民と学校	千葉 保夫	10
「3・11あの日のこと、あの日からのこと」を読む		
① 高校生の評	石岡 洗平	14
② 会員からの手紙	穴戸 春雄	15
安全に「感情を抱える」ちからを育む	筒井 潤子	16
会員から		
山形からエール	斎藤 健	19
映画「よみがえれ石巻」製作中! ぜびカンパを	柴口 賢一	19
アーサー・ピナード公開授業 受講高校生の感想から		20
戦後教育実践書を読む会に参加して 第2回 「新しい綴方教室」(国分一太郎)を読む会		
に参加して	浅井 時子	22
被災地へ届け! ぼくたちのエール	川名 直子	23
書評「子どもの命は守られたのか」		24
センターのうごき		24

鈴木洋子さん（前門脇小学校校長）に聞く

学校再生への道を考えるために

あの日のことと学校づくりで大事にしたこと

11月16日、ご多忙を承知で無理にお願いし、石巻蛇田のお宅を会員の斎藤俊子さんの案内で春日と清岡がお話を伺いにお邪魔しました。せっかくのお話を紙数の関係で半分ぐらいに縮めなければならぬことは残念ですし、鈴木先生にはたいへん申し訳ありません。そのために先生の意を十分伝えきれずになっている責任は編集側にあることをお断りしておきます。

（春日）

—— 私たち研究センターとしては、この震災を通して教育をもう一回考え直さなければならぬと考えています。私たちのために時間をおとりいただいた鈴木先生に、一つは3・11当日、校長先生だった鈴木先生は、どのようにあの事実に向かい合ったのかということとその後のこと。それから、先生は、ご退職まで20日間を残すだけ、その時、学校へ、子どもらへ、どのようなことをなさったか。加えて、今振り返って、学校で大事になさったこと、お考えになっておられたことなどをお聞かせいただきたいのです。

私にとっての最後の朝会で

あの日のことからお話しいたします。

あの日は私にとって最後の朝会でした。1年生から6年生までの子どもたちにごういう言葉を贈ったんです。「桃花 春風に笑む」。お茶で3月にお軸としてよく掲げられる言葉で、「3月は別れの季節だから、いろんな人と別れる寂しさはあるけれども、その寂しさを耐えながらきちんと生活していくことよって、春風がやってくる」という意味なのですが、私は、「あなたたちがこれから生きるうえで、いろんな苦しいこと、つら

いことがやってくる

と思う。その時にそれをしつかり受け止めて、きちんと向き合っていくときと春がやってくるからね」という話をしました。低学年には難しかったかも知れませんがそういう話をしました。それが、その日の午後、まさしく現実になって子どもたちに襲いかかってくるなどは予想だにしませんでした。

それがあの日の朝会でした。



地震、そして第1次避難

あの時は3年生以上6年生までは6時間目の授業中でした。1、2年は5時間。すでに下校しておりました。3年から6年までの子どもたち約200人と2年2組がまた帰りの会をしていたので、約230人が学校におりました。

2時46分、すごく強い揺れが起きました。立っていられなかったほどです。うちの学校はまた耐震工事がされてないんです。長い揺れだったので、校舎のガラスが割れたり掲示物が飛んだりしたら、子どもたちはパニックになるだろうということを中心に配し、すぐに第一次避難の指示をだし、その時、すでに放送機器は使えなくなっていたので、教務と教頭が1階と2階に分かれて走りまわり避難指示を伝えたのでした。

二日前にも地震がありました。避難解除前に2クラスほど動いた学級があったので、避難解除命令にしたがつて動くようにと言いました。その二日後のことだったということもあるでしょうが、子どもたちは騒がず落ちついて第一次避難ができました。

30年後に必ず宮城県沖地震がやって来る、起こる確率は99%と言われていましたので、管理職になってからは、その時にどのように動くかについては常に頭の中に取りました。特に門脇小は、海が近いのでその対応については心しておったつもりです。

その一つとして、非常時においても教師の指示がしつかりと通るようにしたい。ですから、学校でも、廊下を歩く時も静かに歩く。朝会とか集会のときの出入り、整列の仕方、話の聞き方についても、学校全体できちんと行えるように、赴任したときから職員に話してきました。階段でドミノ状態になることが非常に怖かったです。それを避けるためにもさっき言ったよ

うなふだんの動きというものをしつかりさせておきたいと思つたのでした。

大津波警報出る——第2次避難

第一次避難をしましたですがすごく寒かつたんですね。教頭が体育館を見てきました。体育館はいろんなものが落下して落ちてちよつと入れない状況だと言います。

その頃になると、続々と地域の方が避難して来られました。車も入って来ましたが、その時の雰囲気っていうのは、これまででなかった様相を呈してきました。鈍色の雲がたれこめてぐつと下がり、だんだん暗くなつて風が吹いて雪が降り出し、映画モーゼの十戒で見たような場面光景で、これからなんか恐ろしいことが起こりそうな雰囲気でした。

そのような中で、大津波警報が出ました。津波警報はこれまでありませんでしたが、大津波警報というのは初めてでした。海辺の学校なので、避難訓練のときは、第一次避難は校庭、第二次避難は市立女子高まで。あそこは海拔40mです。うちの学校は10mです。40mの市女高までは避難することを常に行つておりました。

大津波警報が出たので、すぐさまそちらにと避難したわけです。ですから、日和山公園から津波が襲ってくるのを見たのは、30分から40分経つてからのように思います。ですから、かなり早い段階で避難したことになります。子どもたちは風が横なぐりに吹きつけるなか、恐くて不安状態であつたらうけど、落ちついた足どりで山へと急いだのです。

後から地域のおばあさんたちに言われたのは、「門小の子ど



もたちと一緒に逃げたから助かった、ありがとう」って。本当に涙ながらに感謝されました。

その地域の人の避難ともう一つ、住民対応として教頭、教務主任、講師と事務員の4人が学校に残りました。この4人が地域の人たちを助けることになったんです。さつき申しましたように体育館のところにばあさんたちが来たんです。「避難所になつていないんですよ」と言っても、日和山まで急な階段を上っていくのは大変なことなんです。私たちでもすごく息をつかなきゃいけないので、なおさらお年寄りにはきついんですね。これまで地震はきたことがなかったことと、「60年80年生きてこれまで学校まで水がきたことがない。学校まで水が来たら石巻の街は全部水没するよ、そこまで考えなくてもいいから」って、地域のお年寄りとか町内会長さんたちにはよく言われていたんです。教頭ら職員は消防団員や地域の人たちと一緒になつて40人から60人の人たちを机や椅子などで足場を作り、学校の校舎から崖へと教壇をひっくり返して橋桁にして助けたのです。

日和山には日和山公園と鹿嶋御児神社があり、鹿嶋御児神社の方が高いところに位置しています。

その日和山公園に第二次避難したんです。その日和山公園に着きまして、教頭が避難させるときに職員にブルーシートを持ってたんでですね。ブルーシートが子どもたちを寒さから凌ぐのにとても助かりました。高学年は小さい子どもをよく守ったと思います。自分たちも怖かったでしょうけど。低学年は帰ったんですが、みんな結局学校に避難して来たわけですね。ですから、縦割りの活動がここでなされたわけです。トイレに行かせたりとか、寒いので背中に入れたりとか、ブルーシートの端を持つたりとか交替でしていました。

押し寄せる津波

その時に、海面が盛り上がったのが見えたんです。防潮堤が4基ほど見えたんですが、その防潮堤と防潮堤の間に隙間がありますね。その所がちょうどうちの学校にぶつかるように道路があるのです。そこをめがけて、今回、津波で分かったんですが、道路っていうのは水路になるんだということなんです。勢いを増す水路や川となつて津波が押し寄せてくるように感じました。同じように波が防潮堤を超えて南浜町の家並に入つて越えて来たんですけれど、そっちはやはり家があるから障害になるんですね。

石巻市街は南から入り込む波と、旧北上川が遡上した波によつて水没したのがよく分かりました。東側に旧北上川がありまして、そこから500mなんです、学校まで。これ（地図を示して）を見るとちょうどう、ここが門小なんですね。こちらからも波がどつと寄せますね。ここに文化センター、市立病院。このところを車も走っていたのです。それが波に吞まれて。南側と東側からの津波がここで交わり、一直線になつて学校側に押し寄せてきた。その音はすごく凄まじかったです。屋根がフツ、フツって浮くんです。津波は壁になつて山岸に押し寄せてきたのです。

その音の凄さ、日和山公園に避難していた私たちまで吞まれるように思いました。それで、御児神社の方まで上がりました。日和大橋の東側が漁港です。缶詰とか蒲鉾とかの製造業の7割が壊滅状態になつたわけです。日和大橋から西側が工業港です。日本製紙とか飼料工場とか、工業港、こっちは漁港、こちらも7割方水に浸かつたということです。

門脇小学校は開校137年目を迎える古い学校なのです。旧市内で1番古いんです。この地は江戸時代より栄えた所です。伊達政宗の命を受けた川村孫兵衛がこの北上川を開削し港を起

こしたわけです。北上川沿いに新田開発し、その米を平田船で運んできて、そして千石舟で江戸まで送ったのです。当時の江戸の米の3分の1は石巻の伊達の米であったと言われているんですね。

こういうことを子どもたちに話しながら、門脇に生きているあなたたちは歴史と伝統のある土地で生きている子どもたちなのよ。だからあなたたちも頑張ろうねっていうようなことを、1月から3月までの卒業を祝う会の時に、5、6人ずつ校長室で会食します。そうやってお抹茶を出して送り出していたんですね。土地についての誇りを持つ子どもに育ってほしいという思いが私の中に取りました。そういう地域が今回全部失われてしまったわけです。

町内会もしつかりした組織があるんですが、仮設は地域ごとに入りきれませんので、もうみんなバラバラになってしまった。そうすると、ああいうふうに積み重ねてきた組織や地域に根ざしたものがもう戻ってこないわけです。そういうところが、私でも非常に悔しい辛いことです。

子どもの引き渡し、そして石巻高校へ

その押し寄せてくる津波の轟音みたいな音に驚いて、鹿嶋御児神社まで上がったんでしたけれども、すごくまた雪が降り出しましてね、寒くて寒くて、ここにずっと立たせておくわけにはいかなないので、宮司さんをお願いして社の中に入れてもらったんですが、余震で揺れつづけ、恐くて社外にとびだしました。

そうしているうちに日も暮れてきたのですが、その頃までに保護者がどんどん集まって来ていました。それで引き渡しを行いました。引き渡しは、これまで工夫してやってきたつもりです。暑い夏もやっただんですが、夏にやった時には保護者から非常にブーイングがありました。保護者の声を聞きながら、毎年、

変えてきたんですね。そういう積み重ねが危機管理に対する意識づけになったように思います、職員も・保護者も・そして子どもも。それで今回の引き渡しがスムーズにできたように思うのです。

その時確実に子どもを保護者に引き渡すことができたのは、3年目の女子教員が、児童名簿を持ってきてくれたことによります。職員は普通、避難訓練の時は出席簿を持つことになっているのですが、あのひどい揺れの中では出席簿を持つどころどころではありません。上着を着せる余裕もない、もちろんランドセルなんかもそのまま、命からがらですね。半そでで逃げてきた子もおりますから。児童名簿なんてのはだれも頭に浮かびませんよね。それを、3年目の教員なのに、その瞬時の判断ができたのです。私は本当に感心し、その成長ぶりがうれしかったです。その名簿のことだけではありません。職員はみんなそれぞれその場の状況に合った判断をして動いたのです。それが私は今回の対応として職員全員に感謝しているところです。

保護者への引き渡しはその名簿をもとに確実に行なうことができました。その時点で安否確認のできない児童が7人であることが分かったんです。早く帰った低学年の子ども2人、欠席



3年生1人、4人が特別支援の子どもだということです。そのことが、その日のうちにつかめたんです。それはやっぱりこれまでの避難訓練、引き渡し訓練によるところが大きいと、あらためて訓練の大事さを思いました。

その後、迎えに来なかった子どもたち40人と教職員20人が、先ほど言った避難所指定になっている市女高の方に行っただけでも、市女高まで行くんですね、体育館がいつぱい入る隙間もなく、テントの所に放り出される形、寒くて寒くて。そこで過ごすわけにいかないので、門脇中と石巻高に走らせて様子を見させたんですね。門中はもう2千人でいつぱいである。それで、石高が受け入れてくれるっていうのでそこに行っただけです。それが6時過ぎたでしょうかね。その日から2週間石高にお世話になりました。

31日までのこと

私は3月31日で退職しますので、その中でしなきゃいけないことは何かということに非常にも考えました。校舎がないわけですから、全てがないわけです。今まで当たり前に行っていた仕事ができないし、まずは子どもたちが、今どこに避難しているのか、家族はどうなのか、そこを早く知るためにも、鉛筆もない、紙もないっていうような状況。石巻高の中でも印刷も出来ません、電気も来てませんので。

その日のうちに教育委員会に行っただけです。学校がこういう状況なので報告しなきゃいけないと思っただけです。ちょうど、8時頃に委員会の車が回ってきたんです。それに乗せられ市役所まで行くと、くるぶし位まで水がひたひた来ていたわけなんです。小一時間ほど話してさあ帰ろうと思った時には、膝小僧まで水が来ていた。それを津波による水だとは全然想像しなかったのです。(大潮だからかな) みたいな感覚でした。その時大

潮だったのかどうかも定かじゃありません。で、みんな、周りの人たちも委員会の人たちも、津波が川から来たとかというふうには思わなかった。で、その日はそこで過ごしましたね。

次の日になつたら水は腰まで来ていました。向かい側が石巻駅なんですけど、駅の駐車場に車が駐車してますね。その車のつぺんが水に埋もれるほど周りに水に入ってきていました。水没状態ですね。そんななかで私は、えらいことをして来てしまったなと思っただけです。でも子どもたちと職員はみんな居るからそこはやってくれるであろう、と腹をくぐらざるを得ませんでした。

連絡するにもしようがないんです。全てつながりませんから。良かったのは、教育委員会は電気がついていました、自家発電で、そこで名簿を作ったんです。名簿を2種類作って、あとは学校日誌を作ったんです。これから子どもたちの動きがいつばいあるであろうと。その都度対応しても、記録していかないとまた大変なことになるので、記録するものが欲しい、それを作って30枚くらい印刷、バインダーとか鉛筆とか消しゴムとかいろいろな物を入れて、ゴムボートで向かい側の山に渡してもらったんです。

また、私は3月末までに、「学校を、職員室を、どこに置くかということを決めなきゃいけない」と思いました。そこで、震災3日目から、がれきの山と汚泥でぬかる道路を徒歩で近隣の学校の状況を見てまわりました。

早くそれを決めなかったのは、パソコンでも印刷機でも、私が入るうちに入れておきたかったです。そうしないと、転出児童とかのいろんな書類とか出来ませんよね。電話ひとつ引くのさえ大変なんです。ブレーカーが落ちたりするので、電話は何個最低限必要だ、印刷機はいくら、机はこれだけでいいか、大きい机はいらない、普通の長机でいいからなどと、ある程度

職員室の仕事ができる暫定的なものを用意するのが校長の仕事なのだ、管理課に行ったり教育課に行ったりして、そのころをお願いしました。

22日には門脇中の佐々木校長先生に快諾を得、教育委員会にお認めいただき、職員室は門中に置きました。いろんな物が入り、30日ぐらいいまでに電話とかが入ったように思います。

耐火金庫を開ける

卒業証書と要録と学校沿革史は、耐火金庫に入っていたので。それは分かっております。3日後でしたかね、教頭と一緒に校長室に行つてその様子を確認したのですが、堅牢な耐火金庫が波で倒されていて、鍵を持って行つても鍵は使えない状況なので、バーナーで開けてもらわなければいけない。日常の中ではそう無理なくやれることも、あの状況下ではその算段も非常に大変でした。何回も何回も委員会に行つて、ようやく開けてもらったのは、30日でした。

30日は私の退職の1日前ですので、その場で開けてもらった時に、卒業証書は非常にきれいな状態で残っております。コピー用紙の裏側で包んで撥水作用があつたんですね。それで泥にまみれずきれいな状態ということで、卒業式はできると思いました。あと、校長としてたいへん嬉しかったのは、学校沿革史が残つたことです。これが燃えてしまつたらどうやってそこまでの歴史をつないでいったらいいのか、それはできませんですよ、その学校沿革史があつたので、これからの教育につなげられることを確信できたことが非常に嬉しかったです。指導要録も残りました。この3つがあれば、全てあとは燃えつくしたんですが、何とか学校としてはやっていけるのではないだろうかと思えました。

4月15日に卒業式

そして、4月15日に卒業式を行うことになったのです。22日が新年度の入学式だったのでですね。私は（夏休みでもいいかな、無理しないで）と思つていました。職員や新しい校長さんとかが気を使ってくれたんだと思います。22日前に行なつた方が気持ちを落ちつかせることができるであろうということもあつたでしょう。

卒業式の場所は門脇中の3階にある視聴覚室。前の日まで避難所として使われていたこの部屋には卒業生のすわる椅子もありません。床のシートに全員が体育座りでした。卒業生は、男子23人・女子27人の計50人。

卒業式では子どもたちに、「生かされた命なので生き抜いて欲しい」ということを私の願いとして言いました。保護者には、私は、「子育てを共に」ということをずっと掲げてやってきたんですが、それが今回の避難の様子に表れたことを感謝しました。

子育てはともに

「子育ては共に」の意識を高めるのにどうしたかというところ、参観日の時は、椅子は子どもの脇に置いたんですよ。「子どもの様子を見て欲しい」って。「廊下でしゃべっていいほしい」「後ろで腕組んで見ないで欲しい」「子どもの姿を見て欲しい、子どもの脇で」と。

話題についても、（こういうのは齊藤俊子先生から若い頃教わつたことですけど）4月の段階で保護者から聞いてテーマは1年ごと決めていたんですが、その都度またそのテーマに基づいて、親たちから子どもたちのいろいろなことを聞いて、それを授業の中で取り上げ、その様子について話し合うとかをして、保護者と子どもの姿について語ることをすこく

大事にしてきたつもりです。

教育講演会なども開きました。240名中180名位が残るようになりました。それはすごく嬉しかったです。先ほどの避難訓練なんですが、こういう大津波がくるとは思わなかったんですが、学校関係者評価の中で、門小の安全についての教育はいかがですかということに、99・1%の保護者が「いい」というふうに評価してくれたんですね。保護者の意見を聞きながら避難訓練の引き渡しとかなんかやってきました。そういうものを認めてくれたのかなと。学校に任せておけば子どもは大丈夫っていう言葉を頂いたんですね。その言葉が、今回のこの大変な状況の中ではとても嬉しい言葉でした。

「子育てを共に」ということで親と一緒にこなってきた中には、PTAの仕事も一人一役にして、役員さんだけに任せるんじゃなくて、自分ができるのは何かっていうのをあげて、保護者から聞き、3月の末の参観日が、それだけに終始し、子どものことが語られない参観日にならないように、前もってそのことについては決めておくとかというように、少しずつ変えて来たんですね。それで保護者の意識も少しずつ変わってきたのかなと思います。

それから、なんと言っても学校は「授業づくり」ということで、授業を大事にしてきたつもりです。一緒に教材研究をし、指導案を作ったり、授業を見たりすることを積み重ねてきたつもりです。その中で話を聞く姿勢や態度とかを身につけさせるようにしました。

支える言葉をもたせる教育を

今振り返って思うと、つらい時苦しい時に自分を支える言葉を教育活動の中でもたせることが大切であると感じます。卒業生に神戸に行った子がいるんですけど、その子に夏休み

に卒業証書を渡したんです。その子が卒業証書授与の時に、こういうお札の言葉を述べたんですね。

あの時「上がれ、上がれ。もっと速く走れ、走れ。」って言われたその言葉が、僕は、神戸で、今、いろいろとつらいことがあってもがんばれるのは、その言葉が支えになっっているって言っています。

私、それって学校教育の中でうんと大事なことと思う。つらいこととか、そういう時になんか支えとなる言葉を学校の中で得られるような指導をしていく、培うような指導をしていくってことはすごく大事なのかなと。それは強く思っています。そういう気持ち、生きるってことはそうですね。命の大切さっていうのがそうだと思うんですが、その生き抜くってことにそういう言葉を持つ教育をしていくってこと、それを積み重ねていくってことが必要なのかなってというのは、この子の言葉から教わったことです。

よく話し合ってきた職場であると私は思っています。何かにつけみんなで話し合いながらやってきました。これは、みんなで作り上げてきたことだと思います。それゆえ今回のたいへんな時にそれぞれがそれぞれの立場でいい判断ができたことは本当に嬉しいことです。そのような職場であったこと、そこに勤められたことを私は感謝したいなと思っています。

一応学校行事なんかも、教育計画を前年度作りますが、1ヶ月か2ヶ月前に、このことについてもうちよつと考



えてくれないかって前もって言うんですね。そしてそれを入れてもらって職員会議に提案してもらってことをやってきておりました。その一つに安全教育があったように思います。

—鎌田さんの話を聞いた時に、鎌田さんってすごいなあと思いつつも、鎌田さんが一人ではない、学校がチームになつてるなあっていう感じ、ぜひ鈴木先生のお話を伺いたいと思つたのです。もうすでに相当触れられていますけど、学校づくりについて大事になされたことをもう少し伺えますか。

2つのことを学校づくりの柱に

私は学校づくりを2つの柱でやってきました。一つは、なんと言つても授業づくりです。授業をしつかり行うこと。門小の職員は一人3回は授業をみんなで見せ合います。参観日にも簡単な指導案書くんですね。学習の流れを保護者に分かつてもらう。保護者に、今、このところやっているとんだというふうに。それも最初抵抗があつたようですが、それがすんなり受け入れてもらえるようになりました。それから学校行事などや教育講演会に対する保護者からいろんな意見や感想を取り上げていたんですね。私は、全部のクラスで保護者からの感想や意見を取つてもらつて、これを学級でまず使う。私はその中から一つずつもらうんです。いいものをもらつて学校だよりに載せて、保護者にこういう意見があつたということを返してやつていたんですね。その積み重ねつて、保護者に考え方とか書く力をもつてもらつていくことになるし変えていくことにもなるんですね。だんだんと感想の質が高まつていることを感じました。そういうのを積み重ねていくと、学校に対する信頼度が増して来たんじゃないかと思つています。

子どもを介して、親と一緒に子育てをして行くんだよつていうスタンス、「子育ては共に」を二つ目に掲げたのは、相対立するんじゃないかと、育てるために何をするのか、それぞれの立

場ということを大事にしながら育てていく。その発信を、学校はたくさんしていかなくちゃいけないんじゃないかな。そうすることによつて協力も得られると思つんです。

その二つを学校づくりの上で非常に大事にしてきたつもりです。十分とは言えませんでしたけれども。

—そういうことが教師をも刺激しますよね、親がそうなつてくれれば。今度は教師同士も当然お互いに力を付け合うようになるだろうし。しかも、親・教師だけで終わらない。鎌田さんの話の中で、美咲ちゃん、鎌田さんの動きを見ながら憧れを感じるという。お互いがみな結びついていくんでしょうね。

嬉しい言葉でしたねえ。「先生の仕事つてすごい」つて、美咲ちゃんが書いてくれた。あれは涙が出てきます。ああいうふうにして貰つて貰つていと思うと、嬉しいですねえ。授業の時も、一緒に授業づくりはやってきました。話し合いながら。やつぱり授業づくりが一番なつて思っています。これも齊藤先生にしっかりと教わつてきたことなのですからけれども。

私の学校で行なつていた保護者対象のアンケートにもう一つ「家庭教育の在り方」がありました。それは、子育ての悩みとか課題を共有したいなというふうに思つたわけです。2年続けて採つてきた（1年目は出来かねたのでした）のは、まず、「あなたの家庭ではお子さんをどんな子どもさんに育てたいですか」はほとんど変りないんです、2年間やつて。変わんなくてもすごく分かつたのは、訴えてきたものには反応してくれるつてことが分かりました。「夢に挑戦する子ども」とか、「協調性のある子ども」とか、こういうことを訴えてきたら、その分やつぱり意識して受け止めてくれるんだなあつてことが分かりました。そういうことを言いながら、何が大切なのかつてことを私なりに書きまして、子育ての中で、こういうことが望ましいつていうのを挙げていくけど、「じゃあお宅では何してる

の?」って聞く。ふつう、そう聞いても、「じゃあお宅では何を大事にしているの」ってところまで突き詰めて聞くってことはあまりないと思うんですね。そうすると、こういうことやってるっていうことが出てくるわけなんです。ところが、これと、面白いことに、「家庭教育で困っている、課題として受けとめることは何ですか」って、これもほぼ変わらないんですけど。やっていると言いながらやっぱりできていないのが生活習慣であったり、協調性であったりとかするんですよ。ここに気付いていくっていうことが懇談会の中で大事なんじゃないかなって。いいことだけ言わないで、今悩んでいることについてそれぞれ話し合っていくというところを、私なりに揺さぶって行くっていうようなことを、ここやってきたんですね。そして、家庭には家庭の役割があるだろうと、学校には学校の役

割があるよって。子どもって、うちで見せる姿と学校で見せる姿って同じものもあるけども随分違う面があるよって。違う面を見るにはやっぱり学校に足運ばなければその姿は見られないよって。そこに懇談会の意味があるんじゃないか、子育ては共にして行きましようねって、私の主張を訴えていくっていうようなことを積み重ねてきました。

今回の大震災で3日目に子どもを迎えに来た母親がこのようなことを言いました。「子どもたちは学校にいるから大丈夫。門小の先生たちは子どもたちを守ってくれると信じていた」と、たいへん嬉しい言葉でした。

—長い時間、たいへんありがとうございました。

学校再生への道を考えるために

運動会に見る被災地住民と学校

千葉 保夫

はじめに

「白萩の里」と呼ばれるほど萩の花が咲き乱れ、太平洋の潮風を浴び、暖流の影響で穏やかな気候に恵まれ鳴瀬川の河口で農業と漁業を生業とした集落の中心にある全校児童百68人の東松島市立浜市小は、巨大津波で一階天井まで浸水した。児童と教職員の知恵と避難力で全員が奇跡的に救出された。学校関係者に死傷者

が一人もなく避難し協力して405人で一夜を過ごした避難力は、朝日新聞の全国版(2011.5.8付)で紹介された。その後浜市小の職員室は、東松島高校の保健室へ引っ越し、次の小野小学校では、3階の音楽室を職員室し3階部分全部を借用して六学年分の教室を開設し、四月中旬から新年度をスタ



浜市小を襲った津波浸水地図

トさせてきた。学校のすべてのものを失ったの新学期の開始であった。その準備をすすめた渡辺孝之教務は、「困難なのは何が失われたかもわからないことだった」と語っている。何が不足しているかわからないままの新年度の準備を三週間でやることになったのだから、困難を極めたことと思う。「センターつうしん」(No. 64)の「復旧とは復興とは―渡辺孝之―」から、その異状さを知ることがができる。私は、8月(夏休み中に先生方と懇談)と10月(運動会)の2回、間借りしている浜市小の「学校」を訪問する機会があった。そのことを紹介する。

「あの時は、……。」

浜市地域で長年、歌い踊りつがれた「浜市どや節」を全校児童と保護者でおどるといふ種目が始まった。その踊りを守り継承してきた保存会の会長、安部託子さんが演台に立った。「先生方、あの時は、……。ほんとうにありがとうございました」と3・11の震災時の避難対応のお礼から始まった。当時のことを思い涙しながら、被災時の状況を語り終えると「今ここでこの踊りと歌を歌うことができるのもあの時の先生方のお世話のおかげであったことを忘れません」と結び、歌と踊りの説明に入った。「この踊りは、明治11年の野蒜築港から歌い継がれたもので、平成4年に振り付けをしていただいて、私たちの6人で踊り始めてたもので、今また子どもたちを初め、地域のみなさんと踊れることになり感慨深いものがあります」と語り、全校の子どもたちと運動会に参加された地域のみなで踊りあっていた。「浜市の海からはちよつと遠くなつてしまつたが、海に届くような声で歌いおどりましょう」と呼びかけ「エンヤ、ドット、エンヤ、ドット、エーエーエエ、ヨーイトコラサ、今朝の風で、エーエーエエ、ヨーイトコラサ」(11番まである)と歌いだした。地面においた板を櫓でたたきながら力強くリズムをとり、秋晴れの空に、地域の和が一つになり

響きわたつていた。学校が地域の中で期待され生かされ、地域の文化をも大事に継承・発展させる役割を担ってきたことがわかり、浜市の歴史を知る貴重な演技になつていた。

次に「みんななかよし」といふ種目があつた。来年1年生になる子ども達が親に連れられてスタート地点に集まる。校庭の中央を走り、輪をくぐり、縄を跳びはね、スケッチブックをいただき、全員が一団となり、浅野武男校長と黒沢PTA会長とが手をつなぎ、ゆつくりと校庭を一周し、自分の席にもどる種目である。校長先生も子ども達も元気に生き生きと行進する姿があつた。地域と学校が次の新1年生を大歓迎していることのものであつた。新1年生になる子ども達は、校長先生やPTA会長さんから、みんなと手をつないで運動会に参加したことを思い出し来年の四月を楽しみにするのだろう。

会場にいた保護者の佐藤伸寿さんは「浜市小は、いい学校になつてきた。特にガキ大将を復活させてくれた」と自慢気に話していた。「今、家庭の子どもたちは一く二人である。浜市小では、上級生が下級生の世話をするということが徹底していて、いつどんな時でも、上級生が下級生の面倒をみてくれる姿がとてもよい」といふのである。この関係は、学校だけでなく、地域の子ども会などの活動でも生かされているという。

被災後、子ども達は避難所からスクールバスで通学しているが、上級生が下級生の面倒を見、通学している。安心して見守つていられるという。

学校で身につけたことが、地域で生かされる。こんな子ども達の姿を見て、喜ばない保護者はいないであろう。また、間借りの「学校」ではあるが、先生方も信頼し合いつながつていた。



お礼・浜市どや節を説明する安部さん

深めあおう仲間との絆——全校全員リレー

浜市小の運動会のテーマ「チームワークを大切に、深めあおう仲間との絆！」の看板と校章旗が間借りしている小野小の校舎に大きく輝いていた。

5・6年生が準備・進行の役割を果たすことによって、運動会がスムーズに進行していることに気がつき、子ども達の動きを追ってみた。放送の係は何人も子どもが交代しながらアナウンスし、入退場のリードも子どもたちが交代しながら、それぞれの役割を生き生きと果たしていた。その指示に低学年は真剣に行動していた。この5・6年の働きぶりが「ガキ大将」といわれるゆえんかと感心した。圧巻は、最後の全校・全員リレー。全校児童・147人が紅白の2つのグループに分かれ、さらにそれぞれが2つの兄弟縦割りグループのチームを作り、1年生から6年生までが縦割り4チームで競う形であった。

1年生のバトンタッチのしかたは指導されていたのであろうが、もう一人はリレーゾーンのスタート位置に立ち止まって待ち、走ってくる人を見て、しっかりとバトンをもらって向きを変えて走っているが、2年生になると走る方向をみて止まって待っている子が増え、バトンをもらって走り出していた。3年生になると走る方向をみながら少しずつ動きだすが子でてくる。バトンをもらうと全力で走り出すバトンタッチゾーンの子どもの達の動きであった。4年生になると走る方向をじっと見つめ、走りながらリードをとりバトンリレーがスムーズになってきた。5・6年生になると見事なリードをとりバトンを渡す方と渡される方のスピードが同じ速さでタッチされ渡されていく。その成長ぶりが、リレーゾーンを見るとわかる見事なものだった。

途中、なんども抜いたり抜かれたり場面があり、大きな声援が飛んでいた。まさに一人ひとりが主役になり全力を出しきって

走り抜け、バトンが次々に渡されて盛り上がった。あの声援の中で全力を出しきった子どもたちの晴れ晴れとした姿に保護者は盛大な拍手を送っていた。すべての子ども達が全力を出して走り、もてる限りのパワーを出し切った喜びが校庭に溢れていた。

実はこのリレーで使用した運動靴も体育着も紅白帽子、その他すべて支援されたものである。教務の渡辺教諭は、多くの支援に感謝の気持ちでいっぱいだと語っていた。子どもたちの「底力」とあらゆる方々の支援とが一つになつての運動会であった。

命の意味がわかった

4年生を担任する上野玲子先生から学級、たよりをいただいた。クラスの近藤さんが自由学習ノートに次の詩を書いていたので「学級たより」で紹介したという。

「命」 近藤莉央

大震災で、命の意味がわかった

ゴンが死んだ 宮城県で一万人以上の人が死んだつらい

ゴンが津波に流されたとき 大泣きした「大丈夫 ギンは生きている」

梨花ちゃんの言葉が うれしかったー

先生や大人が言う「命は大事」意味がわかった

ギンは私たちの代わりになくなった

今度は莉央がゴンの代わりに 生きる

三月一日は 莉央の誕生日

そして ギンの命日 大震災



来年の一年生と校長・会長さん

私は ちようど 十歳 世界一不幸だと思った
でも 亡くなった人は 死にたくなかったのに死んだ
もつと もつと つらい

10歳の誕生日に、この大震災に遭遇し必死に生きること考える
莉央さんがいた。「命は大事」と誰もが何度も口にかけているこ
とをこの大震災で、実感させられることとなった。命の大切さを
言葉や頭で理解するのではなく、被災を通して学んでいる。この
現実を共に見つめ大事にし次のステップを共に考えたい。子ども
達は、自然の猛威に対して人間の無力さと同時に耐えること、素
直さと謙虚になることを同時に学んでいる。死と向き合い、生か
された自分の命に向き合わざるを得なくなる。そして生き残った
自分の生きる意味を問い返し「生かされたこの命」をみんなのた
めに役立てたいという生き方を選びだしてきている。何よりも命
を大切に自分らしく生きていくことを必死で求め、みんなで助
け合い支え合う、そんな当たり前前の「学校」が求められてきている。
そんな学校の願いが「学級、たより」に見られる。

学びの質の転換を

教師たちの「学校がほしい」と必死に願う求める姿を、地域の
人々も保護者も感謝し支援しようとしていた。しかし、避難する
保護者たちは自分たちの生活がままならず、学校のことまで手が
まわらないことが現実なのである。でも、子ども達は、そうした
教師達の願いと父母の思いを十分に感じていた。教師と同じよう
に、子どもたちも学校がほしい、自分の学校にもどりた、と願
って学んでいた。浜市小で奮闘する教師集団の姿を子どもたちは
しっかりと目にやきつけながら間借りの「学校」に通い学び続け
ていた。

子ども達の存在を大切にし共有していた「運動会」、「学級たよ

り」に見られる学びこそが子ども達が願う「学校」ではないだろ
うか。子ども達が学びの主体となり、活動の主体となって今を生
きることを、そしてその喜びを仲間と分かち合い、深めるパワー（底
力）は浜市の子ども達の心とからだに秘められていた。生きる
ことを考える子が育つ浜市小「学校」があった。これらは、子ど
もたちと教師達が今を生きることを共有し保護者や地域の人々
と、互いに支え信頼し学びあう「学校」づくりの成果でもある。

巨大津波に襲われながら学校で過ごした一夜
を、子ども達は忘れることはない。そして、先
生達が必死に守ってくれた命のありがたさを子
どもたちは一人ひとりがしっかりと心とからだに
刻み込んでいるにちがいない。

この大震災で被災し学校を失った子ども達・
教職員と保護者に、私たちがどれだけ寄り添い
共に学び考えることができるかが問われる。多
くの方とこの震災とこれからの教育の未来と課
題、子らのことを考え語りたいと願う。この大
震災は大ピンチであるが、人間としての原点に
かえり次の世代への新しい「学校」のあり方を
考え、学びの質を転換する絶好の機会でもある。
被災した「学校」と子ども達の心とからだから
学ぶことは限りなくある。「いのち」とは・「学校」とは・「教育
とは何かを、原点に立ったこの子らに寄り添い見守りながら私た
ちは問い・学び・語り、エールを送り続けたい。

（大学非常勤講師）



全員リレーでバトンタッチする子